

## 2017 年度 研究センター事業報告書

研究センター名	間文化現象学研究センター
研究センター長名	谷 徹

### I. 研究成果の概要

本欄には、研究センターの実施した研究の成果について、その具体的内容、意義、重要性等を、項目立てなどをおこないきりだけわかりやすく記述してください。

今年度(2017 年度)は、昨年度(2015 年度)に採択された科研費プロジェクトと連動して、今年度の重点研究目標である「倫理と間文化性」を軸にした研究目標が設定されていた。

その具体的な研究展開は、以下のとおりである。

#### ・研究交流と研究支援

本研究センターは、世界各地の先端的研究者との研究交流の拠点としての機能をもっている。2017 年度に関しては、台湾・高雄の国立中山大学のマティアス・オーベルト教授が、**学術振興会の外国人研究者招聘プログラム**に採用され、本学および本研究センターがその受け入れ先となった。教授は、約二ヶ月間にわたって日本に滞在し、国内各地を訪問して研究活動を遂行し、また関係する諸大学で講演を行った。

本学および本研究センターにおいては、**宿舎の手配(リサーチ・オフィスの全面的協力による)**をし、また、講演会を開催して多くの聴衆を集めた。日本庭園についての教授の研究は、ある意味で「われわれ」になじみのものを新たな(現在の研究の先端的な)視野から理解する可能性を示した。同時に、教授には、本学の授業(主に谷の担当科目)にも随時オブザーバーとして参加していただいた。これは、大学院生とはもちろん、学部学生とも交流の機会ともなったし、また若手研究者の研究指導の一助ともなった。

また、本研究センターは、研究拠点として、公益財団法人・日独文化研究所とも研究交流を進めており、ドイツから**フェリクス・ハイデンライヒ氏**、**ニルス・ヴァイトマン氏**の講演会を、それぞれ開催した。さらに同様に、京都大学に研究滞在していた**カーリーナ・パーペ氏**の講演会を開催した。これらは、間文化現象学の世界的展開を示すものであるとともに、それゆえにまた、研究交流、さらには若手指導にとって重要な貢献となった。

#### ・成果発信と研究展開

他方、本研究センターは、科研費プロジェクトの研究拠点でもある。この面においては、**間文化現象学ワークショップ「倫理—水俣からその根源をたどる」と**、**マーティン・ジェイ氏**を招いて**間文化現象学シンポジウム「『うつむく眼』と間文化性**」を開催した。後者は、本研究センターメンバーによる**マーティン・ジェイ『うつむく眼』**の刊行と連繫しているが、この刊行それ自体も大きな成果であった。

さらに、「暴力からの人間存在の回復」研究ユニットと関連して、『**メルロ＝ポンティ読本**』の刊行には本研究センターの若手が執筆することができた。これは、二つの研究ユニット(その一方が本研究センターとより深く連動しているが)の**連繫による研究の成果**である。

## II. 拠点構成員の一覧

本欄には、2018年3月31日時点で各拠点にて所属が確認されている本学教員や若手研究者・非常勤講師・客員研究員等の構成員を全て記載してください。

※若手研究者とは、立命館大学に在籍する以下の職位の者と定義します。

①専門研究員・研究員、②補助研究員・RA、③学振特別研究員(PD・RPD)、④博士後期課程院生・一貫制博士課程3回生以上に在籍する院生

役割	氏名	所属	職位	
センター長	谷 徹	文学部	教授	
運営委員	北尾宏之	文学部	教授	
	伊勢俊彦	文学部	教授	
	加國尚志	文学部	教授	
	林 芳紀	文学部	准教授	
	亀井大輔	文学部	准教授	
学内教員 (専任教員、研究系教員等)				
学内の若手研究者	専門研究員・研究員			
	補助研究員・リサーチアシスタント			
	学振特別研究員 (PD・RPD)	鈴木崇志	衣笠総合研究機構	学振PD
	博士後期課程院生・一貫制博士課程3回生以上に在籍院生	松田智裕	文学研究科	博士課程後期課程3回生
		横田祐美子	文学研究科	博士課程後期課程3回生
		有村直輝	文学研究科	博士課程後期課程2回生
榊川耕平		文学研究科	博士課程後期課程2回生	
酒井麻依子	文学研究科	博士課程後期課程2回生		
その他の学内者 (非常勤講師・研究生・研修生等・博士前期課程院生等)	神田大輔	文学部	非常勤講師	
	青柳雅文	文学部	非常勤講師	
	小林琢自	文学部	非常勤講師	
	田邊正俊	文学部	非常勤講師	
客員協力研究員	川崎 唯史	国立循環器病研究センター研究開発基盤センター医学倫理研究部	研究員	
	黒岡佳証	中国福建省福州大学外国語学院日本語学科	教員	
	小田切建太郎	日本学術振興会	特別研究員(PD)	
	佐藤勇一	福井工業高等専門学校	准教授	
その他の学外者 (他大学教員・若手研究者等)	池田裕輔	東京大学人文社会系研究科	特別研究員	
研究所・センター構成員 計 21 名 (うち学内の若手研究者 計 6 名)				

### Ⅲ. 研究業績

本欄には、「Ⅱ. 拠点構成員の一覧」に記載した研究者の研究業績のうち、拠点に関わる研究業績を全て記載してください。(2018年3月31日時点)

1. 著書							
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	その他編者・著者名	担当頁数
1	加國 尚志 亀井 大輔 酒井麻依子 佐藤 勇一	『メルロ＝ポンティ読本』	共著	2018年3月	法政大学出版局	松葉 祥一 本郷 均 廣瀬 浩二（編者）	
2	亀井 大輔 神田 大輔 青柳 雅文 佐藤 勇一 小林 琢自 田邊 正俊 (訳)	『うつむく眼——20世紀フランス思想における視覚の失墜』	共訳	2017年12月	法政大学出版局	マーティン・ジェイ (著)	
3	加國 尚志 横田祐美子	『メルロ＝ポンティ哲学者事典別巻：現代の哲学・年表・総索引』	共著	2017年11月	白水社	加賀野井秀一・伊藤泰雄・本郷均・加國尚志監修	
4	佐藤 勇一	<i>Phenomenology and the Problem of Meaning in Human Life and History</i>	共著	2017年12月	Verlag Traugott Bautz GmbH	Lubica Ucnik and Anita Williams (Ed.)	pp. 277-291

2. 論文								
No.	氏名	著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行年月	発行所、発表雑誌、巻・号数	その他編者・著者名	担当頁数	査読有無
1	谷 徹	文明・文化と「零」	単著	2018年3月	『文明と哲学』第10号、公益財団法人日独文化研究所		29-50頁	無
2	伊勢 俊彦	経験世界のヒュームの再構成（三）	単著	2018年	『立命館文学』第657号、立命館大学人文学会		1-10頁	無
3	亀井 大輔	エコノミーと戦略——デリダの脱構築における資源（リソース）の問題——	単著	2018年3月	『立命館大学人文科学研究so紀要』第114号、立命館大学人文科学研究so		79-97頁	有
4	池田 裕輔	「オイゲン・フインクの現象学的カント解釈について（後編）」	単著	2018年3月	『立命館哲学』第29集、立命館大学哲学会		51-80頁	有
5	小田切建太郎（訳）	〈思索する〉と〈建築する〉——構築、脱構築、再構築	単独訳	2018年3月	『文明と哲学』第10号、公益財団法人日独文化研究所	フェリクス・ハイデンライヒ（著）	265-280頁	無
6	横田祐美子	黒衣の娼婦と脱ぎ去りの思考——『内的体験』の鍵としての『マダム・エドワルド』——	単著	2018年3月	『関西フランス語フランス文学』第24号、日本フランス語フランス文学会関西支部			有
7	横田祐美子（訳）	ジュダイズムはヒューマニズムか？	共訳	2018年3月	『人文学報 フランス文学』、514-515号、首都大学東京大学院人文科学研究科	ジョゼフ・コーエン×ラファエル・ザグリ＝オリ（著） 伊藤潤一郎（共訳）	87-113頁	無
8	酒井麻依子	メルロ＝ポンティとG・ゲクス——ソルボンヌ講義における『遺棄神経症』解釈	単著	2017年11月	『メルロ＝ポンティ研究』第21号、メルロ＝ポンティ・サークル		23-42頁	有
9	青柳 雅文	〈非同一的なもの〉としての文化——アドルノの文化概念における間文化性と非同一性——	単著	2018年3月	『立命館大学人文科学研究so紀要』第113号、立命館大学人文科学研究so		29-44頁	有

10	佐藤 勇一	エコノミーと自然法をめぐると文化考察—モンテニョの新大陸とケネーの中国—	単著	2018年3月	『立命館大学人文科学研究所紀要』第114号、立命館大学人文科学研究所	99-124頁	有
11	黒岡 佳証	情感性から生きる者たちの共同体へ—アンリのハイデガー批判から見る共同体の問題—	単著	2018年3月	『立命館大学人文科学研究所紀要』114号、立命館大学人文科学研究所	149-167頁	有
12	加國 尚志	メルロ＝ポンティとイメージの問題	単著	2108年1月	『形象』3号	44-64頁	無
13	加國 尚志	キアスム、非連続の連続—西田哲学と後期メルロ＝ポンティ存在論の接するところ	単著	2017年7月	『西田哲学学会年報』第14号	72-84頁	無
14	加國 尚志	抽象芸術と感情—アンリの生の現象学とリオタルの崇高—前衛論から	単著	2017年5月	『ミシェル・アンリ研究』vol.7	21-39頁	無

3. 研究発表等						
No.	氏名	発表題名	発表年月	発表会議名、開催場所	その他発表者名	
1	伊勢 俊彦	ヒュームの因果言説における現前と不在	2017年12月	因果・動物・所有：一ノ瀬哲学をめぐると対話		
2	亀井 大輔	デリダと歴史主義のアポリア—フーコー論からグラマトロジーへ	2017年9月	日仏哲学会 2017年秋季研究大会、明治大学		
3	亀井 大輔	Derrida and the Aporia of Historicism: Worldview, World-picture, and 'Epoch'	2017年10月	Creation and Destruction of the World, ソフィア大学 (ブルガリア)		
4	亀井 大輔	歴史と言語—『幾何学の起源・序説』と「力と意味作用」	2018年2月	Séminaire: Jacques Derrida à l'épreuve de la catastrophe, INALCO, Paris		
5	亀井 大輔	マーティン・ジェイとジャック・デリダ—『うつむく眼』の後で	2018年3月	間文化現象学シンポジウム 『うつむく眼』と間文化性—21世紀における視覚の行方、立命館大学		
6	池田 裕輔	Fink's Transcendental Phenomenology and the Problem of the World. A Replay to Steven Crowell	2017年6月	What is Phenomenology? Ideas from East Asia		
7	池田 裕輔	Der phänomenologische Horizontbegriff als Grundbegriff des ökologischen Denkens	2017年6月	Phänomenologie und Ökologie		
8	池田 裕輔	La phénoménologie face à Kant : le cas d'Eugen Fink	2017年10月	La phénoménologie et ses autres		
9	鈴木 崇志	他者理解において移入されるもの	2017年11月	日本現象学会第39回大会、大阪大学		
10	小田切 建太郎	ハイデガーのシェリング解釈について—根底と実存及び思惟以前の存在との連関における在的な知—	2017年9月	第12回ハイデガー・フォーラム、京都大学		
11	小田切 建太郎	L'être en tant que contingent : un essai sur l'être chez Heidegger	2017年11月	The 3rd European Network of Japanese Philosophy Conference (ENOJP), Institut national des langues et civilisations orientales		

12	小田切 建太郎	Der Herd im geistesgeschichtlichen Kontext und die Medialität des Seins beim späten Heidegger	2017年12月	Werkstatt Phänomenologie, ウィーン大学
13	横田祐美子	La peur infinie ou la pensée philosophique	2017年9月	Japanese-Bulgarian Forum "The Philosophy and its Other", New Bulgarian University
14	横田祐美子	黒衣の娼婦と脱ぎ去りの思考：『内的体験』の鍵としての『マダム・エドワルダ』	2017年11月	日本フランス語フランス文学会関西支部大会、関西学院大学
15	青柳 雅文	星座と視覚 アドルノにおける視覚をめぐるモチーフ	2018年3月	間文化現象学シンポジウム 『うつむく眼』と間文化性——21世紀における視覚の行方』、立命館大学
16	神田 大輔	フッサール現象学における「見る」ことと動機づけ	2018年3月	間文化現象学シンポジウム 『うつむく眼』と間文化性——21世紀における視覚の行方』、立命館大学
17	小林 琢自	直観と構築——初期クラカウアーにおける圏域論——	2018年3月	間文化現象学シンポジウム 『うつむく眼』と間文化性——21世紀における視覚の行方』、立命館大学
18	田邊 正俊	文化と文明——ニーチェにおける二つの文化概念と一つの文明概念から考察する——	2017年7月	学術交流シンポジウム「間文化的に考える—ドイツ・インド・イタリア・ブラジル・日本の視点から—」、日独文化研究所
19	田邊 正俊	「反視覚中心主義」と「視覚中心主義」の“あいだ”で——『うつむく眼』を手がかりとしたニーチェ思想をめぐる一考察——	2018年3月	間文化現象学シンポジウム 『うつむく眼』と間文化性——21世紀における視覚の行方』、立命館大学
20	佐藤 勇一	いくつかの密かで非意図的な出会い——『うつむく眼』から四半世紀——	2018年3月	間文化現象学シンポジウム『うつむく眼』と間文化性——21世紀における視覚の行方』、立命館大学
21	黒岡 佳祐	間文化性と思考——他なるものとの有和なき対立——	2017年7月	学術交流シンポジウム「間文化的に考える—ドイツ・インド・イタリア・ブラジル・日本の視点から—」、日独文化研究所
22	加國 尚志	メルロ＝ポンティにおける現象学と形而上学	2017年9月	土井道子記念京都哲学基金シンポジウム

4. 主催したシンポジウム・研究会等					
No.	発表会議名	開催場所	発表年月	来場者数	共催機関名
1	Carina Pape 氏講演会 Lacks and Surpluses——The Value of Diversity	立命館大学 末川記念会館	2017年6月	約20名	立命館大学人文科学研究所
2	コーエン氏・ザグリ＝オルリ氏講演会 ジュダイズムはヒューマニズムか？—— デリダ、レヴィナス、ハイデガーをめぐる て	立命館大学 末川記念会館	2017年7月	約30名	
3	フェリクス・ハイデンライヒ氏講演会 〈思索する〉と〈構築する〉——構築・脱 構築・再構築——	立命館大学 末川記念会館	2017年10月	約20名	公益財団法人日独文化研究所
4	マティアス・オーベルト氏講演会 日本庭園についての現象学的考察	立命館大学 末川記念会館	2017年11月	約20名	
5	ニルス・ヴァイトマン氏講演会 根本諸経験としての間文化哲学	立命館大学 末川記念会館	2018年2月	約20名	公益財団法人日独文化研究所
6	間文化現象学ワークショップ 倫理——水俣からその根源をたどる	立命館大学 末川記念会館	2018年3月	約50名	
7	ワークショップ「実存思想の展開可能性」	立命館大学学術館	2017年10月	約15名	
8	間文化現象学シンポジウム 『うつむく眼』と間文化性——21世紀に おける視覚の行方	立命館大学 末川記念会館	2018年3月	約120名	

5. その他研究活動（報道発表や講演会等）				
No.	氏名	研究業績名	発表場所等	研究期間
1	谷 徹	Doing Phenomenology in Different Ways	Investigacioness Phenoomenogicas, Societat Espanola de Phenomenologia	2018年3月

6. 受賞学術賞					
No.	氏名	授与機関名	受賞名	タイトル	受賞年月
該当無し					

7. 科学研究費助成事業						
No.	氏名	研究課題	研究種目	開始年月	終了年月	役割
1	加國尚志	間文化性の理論的・実践的探求——間文化現象学の新展開	基盤研究 (B)	2014年4月	2019年3月	代表
2	谷徹	間文化性の理論的・実践的探求——間文化現象学の新展開	基盤研究 (B)	2014年4月	2019年3月	分担
3	亀井大輔	間文化性の理論的・実践的探求——間文化現象学の新展開	基盤研究 (B)	2014年4月	2019年3月	分担
4	北尾宏之	間文化性の理論的・実践的探求——間文化現象学の新展開	基盤研究 (B)	2014年4月	2019年3月	分担
5	林芳紀	間文化性の理論的・実践的探求——間文化現象学の新展開	基盤研究 (B)	2014年4月	2019年3月	分担
6	佐藤勇一	間文化性の理論的・実践的探求——間文化現象学の新展開	基盤研究 (B)	2014年4月	2019年3月	分担
7	伊勢俊彦	私の人々とともに住み、行動する世界の構成と自己の外部への依存の哲学的研究	基盤研究 (C)	2016年4月	2019年3月	代表
8	青柳雅文	アドルノの亡命期間における現象学研究の解明	基盤研究 (C)	2017年4月	2020年3月	代表
9	小林琢自	尾高朝雄の“現象学的”国家論における「全体」概念について	基盤研究 (C)	2017年4月	2020年3月	代表
10	小田切建太郎	ハイデガーを核とした「中心」とパースペクティヴ性に関する比較哲学及び現象学的研究	特別研究員奨励費	2017年4月	2019年3月	代表
11	鈴木崇志	倫理的観点からのフッサール他者論の再構成	特別研究員奨励費	2016年4月	2019年3月	代表

8. 競争的資金等(科研費を除く)						
No.	氏名	研究課題	資金制度・研究費名	採択年月	終了年月	役割
該当無し						

9. 知的財産権								
No.	氏名	名称	出願人区分	発明人区分	出願番号	公開番号	登録（特許）番号	国
該当無し								